隠人（おに）使い　＜１＞

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
隠人（おに）使い　＜１＞

【Ｎコード】
Ｎ４３３５Ｎ

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】
安倍晴明の末裔である土御門　綾は式神や鬼（隠人＝おんにん＝鬼）を使い父の言葉に従い、東京の高校へ来た。

『隠人使い』スタートです。

壱（前書き）

この小説のジャンルは何になるのだろう・・・　・・・（¥）

壱

その日、藤宮　望は初めて土御門　綾と出逢った。
高校の入学試験合格者発表の日である。
大抵の生徒たちは両親と共に来ていたが、望の両親と妹は海外に出張中で彼一人だけが来ていた。
明るく、人懐っこい性格の望。
「やったー！」
右手に握った番号の書いてある白い紙を握りしめ、思わず隣にいた長身の少年に抱きついてしまった。
「合格、合格っ！」
思い切り抱きしめる。
そこで、はた、と彼の冷たい視線に気付き、慌てて体を離した。
「ごめん！つい、嬉しくって。」
素直に謝る。「君はどうだった？君も一人で来ているみたいだけど。」
と、周囲を見回して何のためらいも無く尋ねた。
「・・・　・・・合格。」
ややあって、その少年は呟く様に答えた。
「そう！」
望は笑って右手を差し出した。「俺、藤宮　望っていうんだ。ヨロシク。」
「・・・　・・・」
その少年は端正な顔立ちで、じっと望の事を見つめていた。
「ほら、握手、握手！」
と、強引に手を握らせる望。
仕方なく、という風に少年は望の顔を見つめ、微かな微笑を口元に浮かべて見せた。
「土御門　綾。宜しく。」

土御門　綾と名乗る少年の本当の姿を望が知るのはもう少し後の事である。
春の訪れを告げる桜だけが、2人の出会いを予期していたかのように、風に乗って彼らの元にその花弁を落としていった。

それから1年が過ぎた、春。
クラス替えの時期だった。

ガラッ

教室の前の扉が静かに開かれ、長身の少年が室内に姿を現した。
右肩には竹刀が入った黒い袋が携えられている。
「土御門　綾だ。」
誰もが彼の存在に気付いた。
「去年、3年生相手に全国剣道選手権大会で優勝した人でしょ。」
「それよりさ・・・　・・・」
少年は、静かに扉を閉めた。
あちこちで囁きが起きる。
「『あれ』って本当？」
「噂だけど、本当らしいぜ。」
「実家も京都にあるって言うし。」
「じゃ、やっぱあの歴史の教科書に出て来た安倍晴明の末裔とかいうのホントなんだ。」
「超ヤバくない？」
そんな声が室内を埋め尽くす。
少年ーーー土御門　綾はそんな生徒たちを気にした風もなく、
「こっち、こっち！綾！」
彼の名を呼ぶ窓際の望の元へと近づいて行った。
「今年も同じクラスになれて良かったな。」
にっこり、と望は微笑み隣の席へ座る綾へ声をかけた。「皆の言

う事なんか気にしなくていいよ。君だってここの生徒には変わらないんだから。」
「・・・・　・・・・」
そんな望にも綾は無言だった。

古来、土御門の性を持つ者は何処かで平安時代、土御門とも称された陰陽師　安倍晴明と繋がっていた。土御門　綾の京都にある実家もそれと同じであり、特に綾の実家は晴明神社の宮司を代々受け継いでいた。
京都から東京の高校へ。
それは、現宮司である父の言葉が所以でもあった。
「西の京（みやこ）は私が守る。東の京（みやこ）は綾、お前が守るのだ。」
その言葉に従い、綾は東京の高校に入り、『隠人（おに）使い』として『闇』の世界から現世に出て来た者たちを『狩る』運命（さだめ）となった。

一般的に鬼は『鬼』と書かれるが、一説によると異形の者や渡来人ーーーつまり、人里で暮らせない人々を『里から隠れた人』という意味で『隠人（れ）』＝『隠人（おんにん）』、そのうち日本の民話や伝説に登場する『鬼』と混同され今日の『鬼』という名称が生まれたのだという。
綾の今の使命は、東京の『治安』を守る事。
『隠人（おに）』＝鬼（隠人）を使い、式神を使い、古来より伝わる『龍王の剣』を使いーーー

「みんなただ物珍しがってるだけだよ。この学校進学校でこれといって噂話しがないからさ。」
望は言った。
「判ってるさ。」
綾は初めて口を開いた。視線は取り出した授業で使う教科書に向けられたまま、「暇な奴らだ。」
「そうそう！」

望は手を軽く叩き、「やっとそういう風に言えるようになったね、綾。去年なんてうざったるそうに人の言う事全然聞いてなかったもんね。」
「うざったいのは相変わらずだ。」
綾は溜息を付いた。
その日の授業は、各担当教師の自己紹介と生徒たちの自己紹介で終わった。
「小林　一子。宜しくね。」
２年Ｂ組ーーー望と綾の担任は英語教師でもある小林　一子が担当となった。「進路についての心配ごと、その他もろもろあったら気がるに声をかけてね。」
まだ２０代の新任教師は最後をそう締めくくった。
放課後、望はサッカー部の部活が終わると、剣道部に出ている綾を待つために、校門へと向かった。
その先には、
「あれ？井上じゃん。」
元同じクラスの井上　遥が黒いセーラー服姿で校門の脇に立っていた。
「何してんの？井上。お前帰宅部だったろ？」
その望の問いかけに、
「えっと・・・　・・・。友達をちょっと待ってるの。」
眺めていた携帯を慌てて後ろに隠す。
「そう、俺も同じ。」
「藤宮くんって」
遥は、横に立つ望に向かい、「優しいよね。」
「そう？」
「うん。」
遥は力強く答えた。「土御門くんの事だっていつも心配してるし。土御門くんって近寄りがたい雰囲気で誰も友達いないじゃん？それに何か変な事やってるみたいだし。」

「変な事？」
望は思わず噴き出した。
確かに、一般人から見れば『何事？』の世界である。
望も最初は彼の力に茫然としていた。
「そんな変な奴じゃないよ、綾は。」
彼はそう言うと、「たまたま綾の実家がそういう家系なんだよ。お寺のお坊さんの息子とでも思えば、何も変な事じゃないじゃん。」
「そう言われてみれば、そうね。」
遥はくすくすと笑った。「お寺のお坊さん。」
春とはいえ、今日は薄曇りで空は暗い。
時間は、午後5時を廻ろうとしていた。
「井上が待ってる友達も部活なの？」
望は遥に問いかけた。
「うん。」
頷くが表情が少し暗い。「でも———もうそろそろ帰ろうと思ってる。今日も無理だと思うから。」
「今日も無理って？」
「ううん、独り言。」
遥は再び笑って、「私、先に帰るね。土御門くんに宜しくね。」
「うん。気を付けてね。」
望の言葉を受け取り、遥は学校を後にした。
それとすれ違うかのように、
「あ。綾！」
校舎から出て来た数人の生徒の中に綾を見つけ、望はその名を呼んだ。
「先に帰っていても良かったのに。」
相変わらず無表情で、望の前に立った綾は言った。「今日は新入生の勧誘の打ち合わせだけだったからさ。」
「でも、一緒に帰りたかったからさ。」
望は肩を竦めた。「俺の家、帰っても両親は海外に妹を連れて出

張中で誰もいないし――綾だってマンションに戻っても誰もいないだろ？退屈じゃん。」
「・・・　・・・まあね。」
ややあって、綾は微笑を浮かべ答えた。
「今日は、あそこで夕食しようか。」
綾が続ける。「お前がこの間教えてくれた、『ＡＲＡＭＩＳ』ってトコ。」
「うん、いいね。」
２人は並んで学校を後にした。
「やっぱあそこ、西洋料理だけどご飯が美味しいんだよね。あと、デミグラス・ハンバーグ。」
「ああ。」
綾と望のマンションは学校を中心とした所にある。１駅だけ違う。
彼らは、駅に向かって陽が傾き始めたアスファルトを歩いていく。
やがて、２人は角を曲がり人通りの少ない横道へと入った。それが、『いつも』ルート。

ガーッ　グアーッ

横道の真ん中辺りで、空から黒いカラスが綾の肩に舞い降りて来た。

ガーッ　ガーッ

『何か』を綾に伝える様に、カラスは鳴いていた。
「何言ってるんだ？綾。」
隣の望がカラスを手に乗せた綾へと尋ねる。
「そういう事。」
綾は頷き、再びカラスを薄曇りの夕闇へと放った。瞬間、カラスは一枚の紙になって、綾たちの足下に落ちて来た。

「式神だったの？」
その紙を拾いながら、望は、「今度は何だって？」
「ナイト・メアだ。」
冷たい視線のまま、綾は望を見つめて答えた。「ナイト・メアっていうおてんば娘が現世（ここ）に遊びに来たようだ。」
「ナイト・メア？遊びに？」
望は首を傾げた。「また『闇』から来た人？」
「そう。」
望からその紙を受け取り綾は苦々しい表情で呟いた。「厄介な奴が来たもんだ。」

壱（後書き）

続くといいね（＾＾；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4335n/

隠人（おに）使い　＜１＞

2010年10月8日11時20分発行